

5) 術後感染予防における抗生剤使用の一考察  
—術後急性腎不全の治療を振り返って—

清水 武昭・篠川 主 (信楽園病院外科)  
青木 信樹・関根 理 (同 内科)

最近9年間に426例の急性腎不全症例の治療に当たったが、うち132例の基礎疾患は消化器外科に関連するもので、76例は術後急性腎不全であった。胃癌、直腸癌などの癌腫の術後がもっとも多く、次いで肝胆道系疾患術後であった。腎不全の原因として、癌腫では縫合不全がもっとも多く、次いで尿管切断などの手術ミスの見落としが多かった。肝胆道疾患では肝内結石、総胆管結石の見落としが、既に腎不全が始まっている症例が多かった。術後急性腎不全とその他の急性腎不全とを比較すると、明らかに異なるのは、抗生剤の使用量であった。前者では2種、3種が多く、極端な症例では6種の抗生剤が使用され、ほとんどが極量に近く、基礎疾患と共に急性腎不全の原因または増悪因子と考えられた。セヘム系とアミノ配糖体の組合せが多くみられ、術後感染予防としての抗生剤使用として、適当かどうかも含め考察した。

6) 胃癌の大動脈周囲リンパ節郭清

佐々木壽英・筒井 光広  
田島 健三・佐野 宗明 (新潟県立ガンセンター 外科)  
加藤 清・島田 寛治  
赤井 貞彦

胃癌手術における大動脈周囲リンパ節(16番)郭清の問題点は、郭清の範囲とその適応にある。胃癌に関するリンパ流の2大集中点は腹腔動脈根部リンパ節(9番)と上腸間膜根部リンパ節(14番)で、ここより16番への転移経路が左と右のルートに分かれて、IMA根部のリンパ節まで下降した後に、Truncus lumbalisに流入して上方に向かう。

従って、郭清範囲は左腎静脈の上下で、下限はIMA根部のレベルまでである。

過去5年間の胃癌切除例のうち Sumpling も含めて16番を郭清した症例は114例で、進行胃癌切除例の約20%にあたる。組織学的に16番の転移陽性例は32例であった。

大動脈周囲リンパ節転移を郭清し、5年以上の長期生存例は3例である。

16番リンパ節の予防的郭清の適応：

PST 適応症例か9番転移例には左側16番を、14番転移例には右側16番の郭清を考えている。

7) 早期胃癌153例の臨床病理学的検討

吉岡 一典・阿部 僚一 (新潟県立吉田病院 外科)  
三科 武 (新潟大学第一外科)  
田中 乙雄

1977年1月より1986年10月までの約10年間の胃癌手術総数は602例であり、その中153例(25.4%)が早期胃癌であった。m 癌69例(45.1%)、sm 癌84例(54.9%)であり、占拠部位はAまたはMが大半で、肉眼型ではⅡcが43.2%であり陥凹型が64.8%を占め、組織型ではtub<sub>1</sub> 39.4%、tub<sub>2</sub> 28.4%の順で多かった。リンパ節転移は149例で検討し、転移率はm 癌でn(-) 95.4%、n<sub>1</sub>(+) 3.1%、n<sub>2</sub>(+) 1.5%、sm 癌でn(-) 77.4%、n<sub>1</sub>(+) 17.9%、n<sub>2</sub>(+) 4.8%であった。術式の大多数は胃亜全摘 B-I 法 R<sub>2</sub> 郭清であったが、11例に幽門側2/3切除、25例にR<sub>0</sub>~R<sub>1</sub>の縮小手術がなされた。予後は手術死2、再発死4、他病死6で、他病死を除く5年粗生存率(直接法)は、m 癌93.3%、sm 癌92.0%であった。

8) α-フェトプロテイン産生胃癌の治療経験

小林 美樹・佐藤錬一郎 (秋田組合総合病院 外科)  
師岡 長・佐藤 攻  
倉岡 節夫  
曾我 淳 (新潟大学医療技術短期大学部)  
上坂 佳敬 (秋田大学医学部第一病理)

65才の女性。食欲不振上腹部不快感を主訴に某医受診。上部消化管造影にて胃癌を疑われ当院受診。生検にてgroup V と胃癌の確診を得た。入院時血清α-フェトプロテイン(AFP)は23108ng/ml と異常高値を示すが、術前検査術中検索にて肝転移を認めず、術後組織学的にAFP産生胃癌と診断した症例に対し胃亜全摘術を施行した。

術後血清AFPは一時減少するも術後3ヶ月頃より再上昇し、術後6ヶ月にてCTにて肝転移を確認された。

肝転移後の経過は急激で急速なる肝転移果の増大を認め、転移確認後約1ヶ月にて死亡した。

9) 胃悪性リンパ腫治療中に早期胃癌を併発した1例について

田中 典生・佐藤 巖 (南部郷総合病院 外科)  
鰐淵 勉・鹿嶋 雄治  
植木 秀任  
豊島 宗厚・小黒 仁 (同 内科)  
宮島 透  
味岡 洋一 (新潟大学医学部第一病理)

同一の胃に悪性リンパ腫と癌腫が共存する症例は非常にまれで、文献的に検索した結果、本邦においての報告は本例を含め24例である。この場合、癌腫は早期癌であることが多く、25例中15例を占め、一方、悪性リンパ腫は進行したものが多く、sm までにとどまるものは本例を含めわずか3例であった。このことより、両者が共存する場合、悪性リンパ腫は癌腫の発生前に先行するのではないかと考えられた。今回我々は、76歳女性で、1年2カ月という長期的観察を行ない、悪性リンパ腫発生7カ月後に同一部位より2個の分化型早期癌の発生を確認した症例を経験したので、若干の文献的考察を加えてここに報告する。

#### 10) 原発性小腸悪性腫瘍の3例

草間 昭夫・川合 千尋 (日本歯科大学)  
真部 一彦・松木 久 (外科)

小腸原発の悪性腫瘍は比較的希な疾患であり、全消化管悪性腫瘍中約2%で、癌は十二指腸に、肉腫は主として回腸に多いとされている。今回我々は、小腸の非上皮性悪性腫瘍を3例経験した。第1例は、回腸末端部原発の悪性リンパ腫、第2例は、回腸原発の平滑筋肉腫であり、いずれも腹部腫瘍を主訴に入院し手術が施行された。もう1例は、胃癌術後で、上部空腸に原発した悪性リンパ腫による穿孔性腹膜炎で、手術が施行された症例である。何れの症例も、術前の確定診断の成されないまま、やむなく手術が施行された。今回、小腸原発悪性腫瘍の術前診断の難しさと重要性を痛感したので若干の文献的考察を加え報告する。

#### 11) 昭和54年6月よりの7年間当科で手術した大腸・直腸癌64例の実態と予後について

本間正一郎・小林 英司 (県立六日町病院)  
高橋 辰弥 (外科)

魚野川最上流域(人口5万8千人)を診療圏として昭和54年6月新築移転以来7年間当科で手術した大腸・直腸癌64例を検討した(昭和61年5月現在)。症例数(性、年度、部位)、手術(緊急・予定、回数、入院期間合併症手術数)、予後(術後管理、死因、死亡場所)等。

①症例は近年著増(昭和60年度20例)。しかし70才以上が過半(39/64)、しかもその半数が緊急ないし準緊急手術例(20/39)。

②初回手術入院死4例(縫合不全2, その他2), 合併症手術8例(縫合不全3, 癒着性腸閉塞2, その他3)。

③死亡29例中脳卒中1例, 虚血性腸閉塞(推定)1例

以外原病死。また末期入院死亡12例(うち2例内科依頼), 末期入院自宅死4例, 自宅死9例。

以上より臨床的問題点として診断面の他に縫合不全対策(open suture method, 変則3層腹壁閉鎖), 術後補助療法(動注等), 末期医療対策(ホスピスの苦痛除去等)が挙げられた。

#### 12) 虫垂粘液嚢胞の2例

渡辺 和夫・原 滋郎 (県立小出病院)  
大村 康夫 (外科)

急性虫垂炎をはじめ、回盲部周辺の疾患は、極めて多いが、その中で、比較的稀な虫垂粘液嚢胞を2例経験したので、報告致します。

症例1 71才、女性。右下腹部痛にて来院。回盲部腫瘍、熱発、白血球増多より、急性虫垂炎の診断にて手術。虫垂は嚢腫状に腫大し、回盲部への癒着、炎症著しい為、回盲部切除術施行。病理診断は mucinous adenoma of appendix。

症例2 64才、男性。胆石症術後1年目、右下腹部腫瘍触知され入院。CT、CF等にて虫垂腫瘍の疑いにて手術。虫垂は、根部を残し、嚢胞状に腫大し、虫垂間膜や回盲部周囲には、リンパ節腫大や、腫瘍性変化を認めなかった為、虫垂切除術施行。病理診断は、mucinous adenoma であった。

以上の症例報告に若干の文献的考察を加えて、報告する。

#### 13) 消化管粘膜下腫瘍35例の検討

高野 征雄・工藤 進英  
丸山 明則・金子 一郎 (秋田赤十字病院)  
広川 恵子 (外科)

過去15年間に当科で経験した消化管粘膜下腫瘍35例について検討した。病理組織学的には悪性腫瘍13例(悪性リンパ腫6例, 平滑筋肉腫5例, カルチノイド2例)と良性腫瘍22例(平滑筋腫7例, 迷入腺4例, 脂肪腫, 線維腫, その他)であった。発生部位は、食道, 胃, 十二指腸, 小腸, 大腸, 直腸と全ての消化管に認められたが胃に22例と最も多く見られた。最大腫瘍径は良性腫瘍の多くは3cm以下であったのに対し、悪性腫瘍ではほとんどが5cm以上であった。術前に良悪性を鑑別する事は困難な場合が多いが最近経験した悪性腫瘍6例で頻回な内視鏡下生検, CT, 血管造影にて術前診断が可能であった。悪性腫瘍では、消化管癌に準じたリンパ節郭清を伴う術式が選択されたが、絶対治癒切除術を行い得た8例は全例予後良好で最長14年生存中である。以上より